

残酷な《秋元康》が支配する(2)

——何を言っているんだ、君は？ 櫻坂46⇨櫻坂46のために——

高木 信

〇、自分が納得するとは

本稿は、高木 [2024] の続稿である。本稿で言う《秋元康》の定義は、高木 [2024] の註1に記したので参照してもらいたい。簡単に言えば、坂道シリーズや48シリーズに歌詞を提供していると言われる存在を、現実の秋元康とは区別して《秋元康》とするのである。

さて、「Yakult1000」のテレビCMにその《秋元康》が出ている。一五秒版で次のように述べている（「ヤクルト公式」Yakult（ヤクルト）1000：「秋元康」篇15秒）。

今まで四千何百曲と書いているんですけど、言葉を選ぶのに、手を抜くということはないですよ。自分が納得するまでやってますね。

本人は「納得」しているのかもしれないが、その歌詞には意味不明なものが多い。高木 [2024] では、流行の言葉を取り入れたタイトルと耳に付くワンフレーズを中心に、関連しそうな語句を並べて（データベースから引き出すようにして）物語を創っていくのであろうと予測した。ある文字列を推敲しているうちに、手を入れた文字列とその他の文字列とのあいだで齟齬が発生し、意味不明なストーリーになっていき、やがて歌詞が支離滅裂になっていくのであろう（高木 [2024] では、ゆいちゃんず『渋谷川』を分析した）。

「言葉を選ぶ」のに「手を抜かない」という《秋元康》だが、言葉への不信を歌詞にすることも往々にしてある。⁽¹⁾ 検索サイト「MOJIN」で、「秋元康」「言語」で検索をしてみると四例がヒットし、「秋元康」「言葉」で検

索すると五〇〇例がヒットした。本稿は基本的に坂道シリーズの歌詞を分析対象としているので、「秋元康」+「言葉」or「言語」+「櫻坂」or「欒坂」or「けやき坂」or「乃木坂」or「日向坂」で検索を試みた。そのなかで言語への不信を表明していると思われる歌詞をいくつかピックアップしよう。

乃木坂46『気づいたら片思い』（二〇一四年）には、

いつの日にか好きになる

あなたと目があつた時 本当は予感してた

初めからわかってた 特別な人だった

恋とは与えられるもの 決して抗えない

感情を抑えても息が苦しくなる

こんなに好きなのに言葉にしたら消えそうで

とある。八〇年代の歌謡曲を思わせる曲調がとてもよい。だが、相も変わらずの《秋元康》的歌詞であるからであろう、〈なにか〉が「消えそう」なのかわからないし「感情」なのだろうか？ しかしそれにしても理由は不明だ、なぜ「恋とは与えられるもの」なのかわからない。「いつの日にか好きになる」という能動的行為

を、なぜ「与えられる」という受動としてしまうのだろうか。このような不明瞭な言語運用のなか「言葉にしたら」〈なにか〉が「消え」てしまうという不安が脅迫観念的に唄われている。《秋元康》的言語運用がストーリーを、そして明確な意味を削り取っているにもかかわらずにである。

日向坂46『愛はこっちのものだ』（二〇二三年）には、

(Say what?) 元気だったかい？

(Right on) こんな夜は朝まで踊ろうぜ

(I know...) 言葉はいらない

(Oh Yes) そう瞼閉じっ

(Groovy) ただ揺ればいい

Feeling the sparks fly

と、別れた彼女とクラブで再会してダンスに誘う男が出てくる。「今夜だけ (Yeah) 戻そうぜ (Yeah) 時計の針をあのに」と浮かれ、「夏の星を思い出したらキスをしないか？」と口説くのである。しかし、

その時気づいたんだ 君に連れがいるってこと

まさか彼氏と来てたなんて
ごめんね 懐かしくなつて

悪いことしちゃったな 踊るしかない

と、迷惑な元彼でしかないことに自身で「気づく」のであった。が、それにもかかわらず、「(愛を始めよう)」とか「愛はこっちのものだ」とか言つて(思つて)もいるのである。「言葉はいらない」と、対話をしようとしてないから、ただの迷惑な元彼になってしまうわけだ。事実確認と相手の都合は、「言葉」で確認しなければならない。「踊るしかない」と言っている場合ではない。「身体」性が「言葉」の不自由さを補うという主張なのかもしれないが、「ごめんね」に続くのにふさわしい行為(かつ発話)ではない。

櫻坂46『無言の宇宙』(二〇二二年)は、

運命以上の 行き過ぎた感情

なぜだろう なぜだろう

言葉なんかいらないつて初めて気づいた

愛を少しでも語り始めたら

愛してるゝ その真剣な気持ちは

心から漏れて行くものだ

知らぬうち 熱が逃げちゃうように

もうお互いに感じなくなる

客観的になつて ものを見るからだろう

大切なものが なぜ大切なのか

考えたつて何になる？

僕は(僕は)君を(君を)

理由なく好きだ

という歌詞である。「愛」を「語り始め」てしまうと「愛している」という「真剣な気持ち」は冷めてしまう。「僕」は語る。理由は「客観的にものを見るから」だそう。熱に浮かれるように「大切だ」と感じていれば、その愛は永遠になるということだろうか。その原理はまったく説明されない。わかることは、《言葉で語ること》客観的になること《理由を考えること》という図式があるらしいことであり、この図式が「愛している」という「感情」を心から追い出していく元凶となっていることくらいである。

このような「言葉」への不信感を書く《秋元康》が、なぜ「言葉を選ぶのに、手を抜くということはないです

よ」と言えるのだろうか。「言葉」にした瞬間に「熱が逃げちゃう」（『無言の宇宙』）のならば、『秋元康』の歌詞には「熱」はなく、その紡ぐ言葉には「客観」性などないだろう。「ただ揺れればいい」（『愛はこっちのものだ』）のであろうから。

《人は変化するのだから》とか、『些細なことをあげつらうな』とか言う人もいるかもしれない。しかし、「言葉」で自身の「思考」や「信条」「主張」を、自身の「署名」を付して表明する者には、ある種の責任が伴うはずだ。変化したり、転向する場合には説明責任がある。二〇二三年末から二〇二四年にかけて自由民主党の裏金問題（派閥パーティーのキックバック問題）が明らかになった。そこで疑惑があるにもかかわらず、すべて秘書の責任としている議員が、二〇一〇年には自分は秘書と確認しながら書類を作って提出していると主張していた。自分の行為を矛盾した「言葉」で騙り、自己正当化することへの疑問や怒りが、ネットなどでも湧き起っている。「言葉」で主張する者は、その「言葉」を反故にするとき、きちんと説明しなければならぬ。

『秋元康』の他の歌詞をもう少し見てみよう。乃木坂46『インフルエンサー』である。

「僕」は「君」のことが気になっている。そこで、「声」くらい掛ければいい 誰もが思うだろう」とは思っているものの、「（できない）」のである。しかし、

その他の誰かなんて

全然興味ないけど（なぜだか）

君が何を考えてるか

知りたくてしょうがない

のである。だが、「僕」は会話をしていないようだ。次の歌詞をみてほしい。

気配以上 会話未満 恋はいつも余所余所しい

胸騒ぎが聴こえないように

世界から言葉なんか 消えてしまえばいい

近くにはいるが会話はしない（ストーカー的な？）距離に「僕」はいるようだ。意外と近いのであろうか、「僕」は自分の「胸騒ぎ」が——「鼓動」のことであろうか——「君」に聞こえないようにしたいから、「言葉」なんか 消えてしまえばいい」と「言葉」の存在を拒否

するのである。「聴こえないよう」にしたいから「言葉」を消すというのは飛躍が大きいだろう。まずは「音」をなくせばいいだけなのだから。

言葉をなくしたら「胸騒ぎ」することもできなくなるのだ。また、「君が何を考えてるか 知りたくてしょうがない」のならば「言葉」の介在は必須であろう。『無言の宇宙』では、「愛を少しでも語り始めたら 愛してゝその真剣な気持ちは 心から漏れて行くものだ」と、言葉によって「真剣な気持ち」がなくなっていくともしている。それならば、どのようにして「君が何を考えているか」(『インフルエンサー』)を知ることができるのだろうか。

また、「考え」ることも「言葉」なしには不可能である。「客観」化して「言葉」によって外部化することで自分の思考ははじめて形を持つのである。言葉がなくなったら〈恋愛〉も不可能となる。加えて、言葉がなかったら〈恋愛〉を唄うことも不可能となるのである(高木 [2009] 参照)。

以上のような、言葉によって可能化されるさまざまな事象を無視して、「言葉」をなくせばいいとする『秋元康』の歌詞は、歌詞自身の成立する基盤を否定してしまつて

いる。そのことを『秋元康』はどのように考えるのだろうか。

一、言葉での意思疎通を拒絶する高校生は

自身が創る歌詞の基盤である「言葉」自体を否定した上で創られる歌詞に「客観的」なストーリーや意味など期待できない。本稿は『秋元康』の作詞した楽曲における、ストーリーや意味、人物関係の支離滅裂さを見ていくものである。

『秋元康』の歌詞では、「学校」「制服」が束縛するものであると語られるものが多い(後述)。樗坂46『制服と太陽』(二〇一六年)では、突然学校生活について、「自由な日々、過ごしてきた」とされる。歌詞を見ると主人公「私」は教師や親によって監視・管理されていることをよしとはしていない。それを、なぜ高校生活が「自由」だったと言えるのだろうか。

『秋元康』が創り出す歌詞の(ストーリーの)都合で、学校は「自由」な場所だったり、教師による抑圧の場であったりとされるのである(樗坂46『月曜日の朝、スカートを切られた』(二〇一七年)を対象にして後述する)。

ところで、親とともに教師と進路の相談に臨む「私」は、教師に「大学へ行くか?」「就職をするか?」と聞かれると(そのレベルのことは考えておくのが高校三年生^③の常識だと思うのだが)、「何を言っても絶対 理解してくれない」と思い、「話の途中 席を立って 教室を出よう」とする。対話Ⅱ説得の拒絶である。「これから先の夢は いつの日にかわかって来る」と根拠のないことを考え、「生き方なんて誰からも指導されなくたって」と他者による関与を拒否する。「傷つき挫けながら 歩き方を覚えるもの 転ぶ前にそう初めから手を差し伸べられたら いつまでも強くなれない」と大人たちの自分の人生への関与を拒否するのである。

が、結果は「(生き方は) 運命が選り始める」と、「運命」に丸投げしてしまう。そもそも「就職をするか?」「大学へ行くか?」という質問は「手を差し伸べ」ているわけでもない。それは、基本的に初歩的な進路指導である。もちろん、進路指導と称して、本人が納得しない進路を押しつける場合もある。だがここではどちらに進むのかを聞いているのであるから、進路の押しつけはないと言ってよさそうだ。

進路をどう考えているのか質問する教師(大人たち)

に対して、どうせわかってもらえないから対話は無意味であると考え、逃走するのでは、そして「運命が選」ぶと言っているのでは、「心の光 感じるまま 自分で決める」と言われても、〈何〉を「自分で決める」のかわからないままである。「私」が言う「自由」は、「決める」こと先延ばしすることではしかない。そして、その先延ばしを可能とするために「言葉」で了解し合うことを放棄しているのである。

「何を言っているんだ、君は?」と、問いたい場面だ。

対話を拒否することで、自家中毒的に自己の内面のみを絶対化していく。それでは、自分の思考に矛盾があるうが、自己の論理が破綻していようが、根拠が不明であろうが、思考を修正していく機会にはや訪れない。

それは「言葉」を不要だと書いてしまう《秋元康》にもあてはまるのではないだろうか。

別の角度からアプローチしよう。学校や大人への不信感を述べる歌詞を書く《秋元康》である。たとえば、櫻坂46『月曜日の朝、スカートを切られた』である。

① どうして学校へ行かなきゃいけないんだ

真実を教えないならネットで知るからいい

友達を作りなさい スポーツをやりなさい

作り笑いの教師が見せかけの愛を謳う

反抗したいほど 熱いものもなく

受け入れてしまうほど 従順でもなく

あと何年だろう ここから出るには…

大人になるため 嘘に慣れる！〔中略〕

②これから先もずっと電車は満員で

夢も希望もないのに各駅停車かい？

努力は報われますよ 人間は平等ですよ

幸せじゃない大人に説得力あるものか

死んでしまいたいほど 愚かにもなれず

生き永らえたいほど 楽しみでもない

もう持て余してる 残りの人生

目立たないように 息を止める！

「学校」や「教師」への不信任感が語られるのである。「学校」という制度に対する不信任や嫌悪を持つことは、ある意味では自然なことであろう。「学校」は近代国家を支えるための身体を作りあげる装置であるのだから（フーコー[1975]参照）。

だが、『制服と太陽』（二〇一六年）と『月曜日の朝…』

（二〇一七年）とを並べてみるとどうだろう。前者の「私」は、大人を拒否しながら制服を着て校庭を走り回った日々を自由としている。後者の「私」は学校を「出る」までの年数を数え、そこから脱出する日を心待ちにしているようである。乃木坂46『制服を脱いでサヨナラを』（二〇一五年）でも、「この制服を脱いで自由になろう」と唄っている。

もしこの二曲の「私」が同一人物で、ほぼ同時期にそれぞれの発話をしていたらどうであろう。なんの説明もなく矛盾した主張をしているとしか捉えられないはずだ。もちろん、主張が変わっていくことはあるだろう。しかし、それには状況の変化や心情の変化などという理由を述べないと、説得力はない。ここでの主張には、理路整然とした論理があるとは言えないのだ。

ここで別の語り手を召喚してみよう。『大人は信じてくれない』（二〇一六年）の「僕」である。「僕」は「大人は判ってくれない 胸が苦しいことさえ… そうさ自分が子供の頃を忘れているんだ」と、「判って」もらえなさを訴えている。どうせ「理解」してもらえないと言いう『制服と太陽』の「私」は教室の外へと飛び出していった。この「私」に対して、「判って」ほしい（「判っ

てくれない」とは「判ってほしい」の裏返しだ」と訴える『大人は信じてくれない』の「僕」は、「誰も探してくれない」と「時代の片隅」で「孤独」に存在していると主張する。

乃木坂46『大人たちには指示されない』（二〇二一年）では、「大人たちには指示されない 自分の道は自分で決める〔中略〕わかっていくとしてくれないくせに」と、また反抗してみせてもいる。

「大人」との関係において、「私」や「僕」はどうしたのか、「大人」をどう定義しているのか、『秋元康』の歌詞群のなかで焦点を結ばない。

これらの〈私〉を生みだしているのが、『秋元康』である。矛盾した主張を「語り手たち」がしていることについて、なんの説明もない。楽曲として同じ主張ばかりしてはいられないという現実的な（売上げ上の功利的な）理由はあるかもしれないが、「言葉を大切にする」のであれば、「言葉」が生みだす「主張」も大切にしなければならぬ。なんの説明もなく、矛盾した主張を垂れ流し、それを〈おしゃれな〉言い回しで糊塗するのは、不誠実であろう。

このような矛盾に拍車を掛ける楽曲がある。櫻坂46

『One-way-stairs』（二〇二二年）は、上り階段しかない「違法建築」の「繁華街の雑居ビル」に「迷い込んだ」主人公が階上へと上り続ける歌詞である（にしても、上り階段しかないというのは階段の構造上ありえないだろう。階段はつねに上ることも下ることも可能はずだ。下から襲撃され続けているのでなければ）。

階段を上り続ける主人公であるが、「Yeah 価値のあるものは Yeah 未来だけ Ha 計算したって 答え出るわけねえ 損と得の綱引きばかり ありがとう Oh Oh どれだけの自由あるうが 何の意味もないんだ」とここでは「自由」が否定されているのである。

二、反省なんかしない「僕」は

また一曲中に矛盾した言説が配置されてもいる楽曲もある。たとえば、櫻坂46『BAN』（二〇二一年）である。

主人公で語り手である「僕」はゲームをしていて気がついたら大人になっており、周りの人々は忙しい日常を送っているという情況に置かれていた。そんな「僕」は自分が「人生の電源切られるように」社会から「退場っ

てこと?」と、自分が「BAN」《追放》さてれてしま
うのではないかと危惧する。それについて、

① BANされても 禁止されても

ダメだって言われても もう 今さら

違う自分になれるわけじゃない? [中略]

わかりました 改めますって 反省なんかしない

神様 何がいけないんですか?

どこがその基準なのか知りたい

と、「何がいけない」のかわからないので、反省しない
し、変わらないと宣言する。ただし、「BAN」の「明確
な基準」が「神」によって定められているかのように語
り、なおかつ「いけないんですか」と語ること、BAN
されることをマイナスに捉えていることもわかってしま
う(自分の行為を「過ち」ともするのである)。

資本主義社会のなかでさまざまな価値観を再生産し続
けることを肯定的に捉えることができないのであるなら
ば、《抵抗》の手段として「BAN」されるという道を
選ぶことはありえるだろう。社会に迎合するだけが生き
る道ではないのはいうまでもない。

だが、「僕」はそのような信念をもって社会から降り
ようとしているわけでもないようである。

知らなかったただけなんだ もう一回くらい

やり直すために チャンス与えてくれよ

と、赦しを乞うのである。そして「知らなかった」と
いう割には、

若さってのは 失敗のための 猶予って信じてた

神様 過ちを許してください

と、「僕」は「猶予」期間があると「信じて」いる。
つまり、現在の「失敗」は想定内の、確信犯であったこ
とがわかる。失敗しても許されると思っていたら、BAN
されたことに驚いているのが「僕」なのである。うっ
かり、「明け方までスマホで動画を観てた」わけではない
し、「ゲームして」いたわけではない。うっかり「遅刻
して 全てのことに遅刻して 今日もサボってしまった」
わけではないのである。「時間はあんなにあ」る
と思った上での行動なのである。ところが、BANされ

たと思った途端に「神様」に救いを求める、そのみつもなさ。

「神様」に救いを求めた「僕」であるが、突然「暗闇が来るまでには まだ間に合うだろう」と考えるのである。赦しが必ず訪れると考える根拠はどこにも存在しないのである。そして歌詞は終わりを迎える。引用部①を繰り返してである。

B A Nされた↓引用部①反省などしない

↓神様に救いを求める↓根拠のない希望の発生

↓引用部①反省などしない

という流れである。結局は「反省なんかしない」と言いのける「僕」である。「神様」にすぎた「僕」は「過ちを許して」ほしいのか、それとも「反省なんかしない」のかどちらなのか明確にはならない。この両極端の思考についての詳しい説明はない。矛盾した思考が投げ出され、「僕」が現状を反省したのか、それともしていないのかわからないまま、投げ出される。

先に見た『月曜日の朝、スカートを切られた』をもう一度見てみよう。「大人」と「真実」をめぐる矛盾した言説を考察する。

語り手である「私」は「大人になるため 嘘に慣れ

ろ！」と言う。これはどういう意味なのであろうか。

A 今現在の「嘘に慣れ」て過ごして学校を卒業しさえすれば、大人になれば自由になれるということなのか。それとも、

B 「大人になる」とは嘘まみれの生活に突入することなのだから、今から「嘘に慣れ」はじめておこうということなのか。

A ではないだろうというのは、大人を「幸せじゃない」と形容していることから言えそうだ。理想像を大人に見いだしていない以上、大人になることに意義はないからだ。するとB的な解釈になるしかない。それだとすると、「ここ」＝「学校」から出ることの意義とはなんであらうか。「学校」で「反抗」的でもなく「従順」でもない「私」は、「死んでしまいたい」わけでも、「生き永らえたい」わけでもないと言う。すでに「残りの人生」を「持て余している」のである。これではすでに「夢も希望もない」「幸せじゃない大人」と同じではないか。「嘘に慣れ」る必要などない。「真実を教えない」のが「学校」だとして、自分で「ネットで」調べればいいと考えている「私」は、虚偽の世界である「学校」に対して、その外部に〈真実〉の世界があると考えているはず

だ。にもかかわらず、学校の外に出ても今と同じなのだ。としたら、論理的には〈外部〉に〈真実〉など存在しないことになるはずだ。「私」はどこに〈真実〉があると思っているのだろうか（ナールバスに真実はあると信じているようだが）。そして、「残りの人生」をすでに諦めている「私」は「大人」と同じように「夢も希望もない」のだろう（これはあとで見る『最終の地下鉄に乗って』と異曲同工でしかないだろう）。「私」と同じである「大人」が信じられないのならば、「私」は「私」の思考も信じられないはずだ。そして、「残りの人生」を「持て余している」という言説自体が、「私」の〈真実〉の気持ちでもなくなってしまう。究極的には「幸せじゃない大人」という認識も〈真実〉ではなくなってしまう。

言葉を自由気ままに使用することで、このようなパラドックスが生まれてしまうのである。

さて、「矛盾」した言説の一端を見た。これらの矛盾を〈文学的〉だとか〈人間の真実〉だとか言って誤魔化してはいけない。それぞれの思考に深みもなく、そのような思考に至った文脈も描かれていない。矛盾した言説が、無責任に配置されているだけである。

「何を言ってるんだ、君は？」である。

歌詞レベルではないところで言えば、櫻坂46のメンバーがこの楽曲を聴いている「僕」に代わって、「僕」を正当化してくれているなどと考えたら大間違いであるということは押さえておきたい。そのような錯覚を産み出すとしたら、プロデューサーとしての《秋元康》の罪は深いと言いたいようがない。

三、クリスマスキャロルが聞こえる頃には

《秋元康》は作詞家としての長い経歴を持つ。「残酷な《秋元康》が支配する」という論考群は坂道シリーズに提供されている歌詞について分析するものであるが、ずっと引つかかっていることを考えてみたい。稲垣潤一の代表曲のひとつで《秋元康》が作詞した『クリスマスキャロルの頃には』（一九九二年）である（楽曲としては名曲だとは思っている）⁽⁴⁾。

① クリスマスキャロルが流れる頃には

君と僕の答えもきつと出ているだろう

クリスマスキャロルが流れる頃には

誰を愛してるのか今は見えなくても

②この手を少し伸ばせば 届いていたのに
1ミリ何か足りない 愛のすれ違い
お互いを分かりすぎていて

心がよそ見できないのさ

③クリスマスキャロルが聞こえる頃まで
出逢う前に戻ってもっと自由でいよう
クリスマスキャロルが聞こえる頃まで
何が大切なのかひとり考えたい

④誰かがそばにるのは 暖かいけれど
背中を毛布代わりに 抱き合えないから
近すぎて見えない支えは
離れてみればわかるらしい

⑤クリスマスキャロルが流れる頃には
君と僕の答えもきつと出ているだろう
クリスマスキャロルが流れる頃には
誰を愛してるのか 今は見えなくても

⑥クリスマスキャロルが流れる頃には
どういう君と僕に雪は降るのだろうか
クリスマスキャロルが流れる頃には
どういう君と僕に雪は降るのだろうか

引用部①のブロックをまず見よう。稲垣潤一『クリスマスキャロルの頃には』の物語現在かつ語りの現在でもある「今」、「クリスマスキャロル」は聞こえていない。ちなみに「クリスマスキャロル」とは、『世界大百科事典』によれば「クリスマスの時期に歌われる宗教的な民謡を総称する」ものである。つまり、物語現在Ⅱ語りの現在である「今」はクリスマス以前である。

そして引用部②から、恋人同士のふたりは「愛」が「すれ違」っていることがわかる。そこで語り手である「僕」は、クリスマスの時期まで「出逢う前に戻って もっと自由でい」て、「何が大切なのかひとり考えたい」（引用部③）と、離れることを決めたようだ。ここは、「僕」ひとりがどのように考えて決めたかと読めるようになってくる。

そして、クリスマスの頃には「君と僕」の関係がどうなっているのか（引用部⑤）「君と僕の答えもきつと出ているだろう」、引用部⑥「どういう君と僕に雪は降るのだろうか」明確になるだろうと、「僕」は考えている。

「クリスマスキャロルが 流れる頃には 誰を愛してるのか」とあるように、物語現在かつ語りの現在の「今」「見えなく」なっているのは、恋人たちがそれぞれに

（この点は要検討である。「僕」だけが「君」を愛しているのかどうかわからなくなっている可能性があるからだ）愛している相手が誰なのかという点である。「僕」の一人称語りであることから、「君」の内面は語られないし、「君」が置かれていた状況もわからない。「僕」の言葉にしたがえば、「君と僕」の「答え」＝「誰を愛しているのか」とあるので、「君」も「僕」もともに、相手を愛しているかわからない状況にあると考えるしかない。しかし、「僕」はふたりの答えがクリスマス直前の頃には出ているだろうと語っている。だが、なぜ「クリスマスキャロルが流れる頃には」ふたりの答えが出るとわかるのか、その根拠はテキスト中にはまったくない。しかも、「僕」自身のことならば、「僕」に予想はつくだろうが、「君」の答えも同じ頃にでているとだろうとする根拠はどこにも存在しない。

わかることと言えば、引用部②で「お互いをわかりすぎていて 心がよそ見できないのさ」と、引用部④にある「誰かが そばにいたのは 暖かいけれど 背中を毛布代わりに 抱き合えないから」ということである。しかし、引用部②「心がよそ見できない」状況と、引用部④「背中を毛布代わりに 抱き合えないから」とい

う状況は矛盾していないか。引用部④のように背中合わせでいるような状況にいるふたりが、「わかりすぎて」いて「よそ見できない」というのはどういう状況だろう。②では「よそ見できない」としているのに、④では視線が混じり合わないことが示される。②と④とでは視線の方向が真逆になるのである。

ちなみに、「抱き合えない」とあることから、ふたりともが背中を向けているととるしかないのかもしれないが、ひとりだけが背中を向けており、もうひとりがその背中を見つめているということは可能性としてはありえる。すると、「君」は「僕」を見ているが、「僕」は「君」に背を向けている可能性が発生することは押さえておきたい（逆もまたありうるのだが）。

にもかかわらず、「僕」が「心がよそ見できない」と心理的には相手のことを考えているとする。引用部③「出逢う前」と違って「自由」でないと考える「僕」が、「心」を「君」にだけ注いでいるとは言えないはずなのに。

ふたりの関係において、身体的距離があること、心理的距離がないことがどのように作用しているのかは不明のまま放置される。

これらは、《秋元康》の歌詞に出てくる語り手「僕」による「僕」「僕たち」が置かれている情況説明のいい加減さ、矛盾が顕れている箇所であろう。

※

この楽曲は、「君」と「僕」とそれぞれに好きかもしれない別の人が現れたため、ふたりの関係が壊れそうになっている「今」、クリスマス直前まで冷却期間を置くことで、今後のふたりの関係がどうなるかが決まるだろうと読める。しかし、次のような断片がそつと置かれているのである。

④ 近すぎて見えない支えは

離れてみればわかるらしい

この引用部④の「支え」は誰にとつての「支え」なのだろうか。まず考えられるのは、「僕」にとつて「君」は支えである。ところが「今」、「君」の重要さがふたりの距離の近さゆえによくわからなくなっている。「離れて」みたら再確認できるだろうと一般には言われているから、距離を置こうと「僕」は考えているということだろう。「らしい」を一般論の伝聞として捉えるとそうなる。

ろう。

ところで、これを「君」に重心を置いて見てみるとどうなるだろうか。「君」にとつて「僕」は支えであるから、「僕」の重要さは「僕」から「離れ」たらきつとわかるだろうと「君」は考えているらしいと「僕」が思っているということになる。だから「君」だけに別に好きな人ができたと、ここは一瞬読めてしまうのだ。「らしい」を推量ととつて「君」の内面を「僕」が予測していると考ええる。すると「今」ふたりが離れなければならぬ原因が「君」だけにあることになるだろう。「君」の主張として「離れるとわかる」があるのだとしたら、「僕」はふたりが離れることのすべての責任を、「君」に押しつけていることになる。

このどちらが正解かはわからないのだが、引用部③「出逢う前に戻って もっと自由でいよう クリスマス キャロルが 聞こえる頃まで 何が大切なのか ひとり考えた」とあるように、「ひとり」で考えたいのは「僕」なのであり、「自由でいよう」と提案するのも「僕」である。と同時に「今」自分が「自由でない」と思っていることもわかる箇所である。

「僕」に出来事の責任があるはずなのだ。しかしなが

ら、その責任が「僕」ひとりにならないかのように、「僕」は〈語る＝騙る〉のである。

非常に論じにくいテキストであるが（それは情報の曖昧さが原因なのであって、思想的な深みがあるからではないのだが）、離れていくふたりの「今」にはみつつの可能性がある。

A 「僕」と「君」とがともに別に好きな人がいる。

B 「君」にだけ別に好きな人がいる。

C 「僕」にだけ別に好きな人がいる。

ここで「別に好きな人がいる」とするのは、歌詞中に「誰を愛してるのか 今は見えなくても」とあるからだ。もちろん「飽きたから」とか「好きではなくなったから」という理由も考えられるのだが、「誰を愛しているのか」からは《愛する誰かが必ずいる》としか解釈のしようがない。

この楽曲をして、クリスマス直前にふたりが元の鞘にもどると解釈する人は少ないはずだ。ネット上の「考察」では別れは必然とするものが多い。「僕」が紡ぎ出すストーリーでは、その責任が「君と僕」ふたりに（あるいは「君」だけに）あるように読めるようになっていく。だが、引用部④⑤を見ていくと、「距離」を置く原

因は「僕」にのみあることがわかるのだ。それなのに、ふたりに責任があるように語る「僕」の詐術がある。

そして、この詐術的な騙りによって、クリスマスの頃にふたりがどうなっているのかきつとわかるだろうと語るのだが、これはまったくの騙りであろう。なぜなら他者としての「君」が将来どう思っているのかを知る術はないからである。それをあたかも知ることができることで、可能性A（もしくはB）のように、「君」にも好きな人がいると匂わせることができるのだ。

「クリスマスキャロルが流れる頃」に、「君」のことを好きでいるかどうかを「今」判断できるのは、「僕」だけなのであるし、「答え」が「出ているだろう」と判断＝予言することができるのも、現在の状況を（「僕」の心情も含めて）知っているのも「僕」だけなのだ。であるのに、「君」も「答え」を出しているだろうと推量する「僕」の恐るべき横暴さを忘れてはならない。「君」が語らない（語れない）のをいいことに、そして「君」のことを語らないことで、自分に都合のいい未来を予言しているわけである。

「僕」の詐術がこの歌詞の語りにはあることを忘れてはならない。そしてこの予言は当たるであろう。なぜな

ら、未来を語っている「僕」には心当たりがあるからだ。「予言の自己成就」という概念があるが（有里 [2023]）、「僕」の予言は、自身の発言によって未来を規定してしまふというよりも、「今」起きてもおかしくない現象（別れ）を、未来に先延ばししているだけだと言ってよい。わかりきっている未来（それは「僕」にとってのみで、「君」においてはその限りでないはずなのに、「君」をも共犯のようにして）を、不明な未来であるかのように騙ることで、〈悲恋＝悲劇〉を捏造している。

「僕」は言葉を自分に都合のいいように使用し、都合のいい「物語」を創りあげるのである。

四、時空の歪んだ地下鉄は

前節でみた『クリスマスキャロルが流れる頃には』では、「僕」の情況や心情に「君」を巻き込むことで、わかりきっている別れを、いまだわからないかのごとく語り、悲劇的な物語として創りあげていた。

このような曖昧な表現によって、描かれている現状が悲劇的なものであるかのように語る「僕」がいる。《秋元康》の創り出す歌詞にはそのような欺瞞が多い。

櫻坂46『最終の地下鉄に乗って』（二〇二〇年）を見よう。過去に「僕」が考えていたとわかる箇所を〈〉で括った。現在か過去かわからない部分は《》で括った。《》が多いことから、この歌詞において「僕」の感情がいつのものなのか不明なことがわかるであろう。

①《最終の地下鉄をいつも選んで乗って
ガランとしている車両に立っていると
本当に孤独になった気がして来る

《景色のないトンネルは人生みたいで
騒々しい音を立てて過ぎるだけ
うっかり 下を向いてたら終点になる

②同じ車両に誰かがいたって

《シンパシーなんて全く感じない》 ああ

駅のベンチには酔いつぶれかけた
サラリーマンが愚痴を言ってたけど
明日になれば いつものように
ラッシュアワーに揉まれてる

③《誰もいない世界へ行きたい》
そんなこと思っていた

あの頃の僕って病んでいたのかな

ひんやりしてるガラス窓に
気づけば おでこをつけてた

〈なぜ それでも人間は我慢しながら
毎日生きているんだろう〉

僕にはそれが不思議だった

〈何が嫌ってわけじゃないけど

無理をして微笑むしあわせなんて要らない〉

④ 地上なら今自分がどこら辺りかって

街並みから見当もつくけれど

〈今さら もうどうでもよくなっちゃったよ

誰がどこにいて何をしていようと

僕にとっては全然 興味ない〉 ああ

大事なことはこれから行き先

〈この地下鉄をもし乗り越したら

どこまでいってしまうのだろう

もう戻ることはできないのに…〉

⑤ 〈まだ知らない世界へ行きたい〉

ぼんやりと思っていた

《この世の中 昨日の繰り返しだ

ドキドキとする何かなんて

ない》ってわかってしまった

ねえ それでも生きなきゃいけないって
結構辛いことじゃないかな

僕にはそれが耐えられない

だけど 今 すぐ死んだりはしない

急がなくなっちゃってそのうちにみんな死ぬんだから

⑥ バイト終わってから いつもと同じように

最終の地下鉄に 乗っている

《僕はいつになれば 違う時間帯の

生き方を選べるんだろう》

〔引用部③の繰り返し〕

⑦ これから の人生 期待なんかしてない

この歌詞のポイントは「あの頃」と語りの現在の「今」
とをどこで切り分けるかである。

《秋元康》の歌詞には無駄に指示語が多いのだが（歌詞に詰め込める字数には限りがあるのだから指示語は減らすに越したことはないだろうに）、ここでも「そんなこと」の指示内容がわかりにくい。

引用部③「思っていた」とあるから、引用部③は過去のことだとはわかる。そして、直前の二重波線部「誰もいない世界へ行きたい」と「あの頃」の「僕」が「思っ

ていた」こともわかる。また、「僕」は引用部⑤「まだ知らない世界へ行きたい」とも語っている。ただし、無人の土地である「誰もいない世界」と自分が「まだ知らない」だけの人が住んでいる「世界」とではまったく違うのであるが。

では、「誰もいない世界へ行きたい」と思っていた「あの頃」の「僕」はどこにいて、何を考えていたのだろうか。同時に、この歌詞を語っている現在（「今」）の「僕」はどのような存在なのか、どのような思考をしているのだろうか。

この歌詞を読むと（楽曲を聴くと）、一瞬冒頭部の「最終の地下鉄をいつも選んで乗って」いるのは「今」の「僕」と捉えてることになる。それは「：た」という過去の助動詞を使用せず、「乗って」「立ってる」「気がして来る」と現在形で語ることによる。それは引用部②についても言えることだ。そのあと引用部③の波線部「思っていた」「おでこをつけてた」「不思議だった」には、すべて過去の助動詞が使用されていることで、引用部①②と引用部③とで時間軸が違うと思わされる（だから《の閉じ》をどこにつけてよいかわからず、放置してしまっただけだ）。

しかし、文脈を追うと、引用部①「地下鉄」「車両」「トンネル」、引用部②「駅のベンチ」、引用部③（明確に「あの頃」とわかる箇所）「ガラス窓」、引用部④「地下鉄」という単語の繋がりから、冒頭部「最終の地下鉄を」から引用部⑤の最初「まだ知らない世界へ行きたい ほんやりと思っていた」までが（「思っていた」とされることから、すべてが過去のことであろうと理解できる）、「あの頃」の「僕」をめぐる描写と心情の表現であるとわかってくる。

引用部①②は、歌詞の後ろ部分を参照しない限り、「今」の「僕」を表象していると読めちゃうのである。それによって、「今」の「僕」と「あの頃」の「僕」とが混濁するわけだ。この混濁は「僕」に変化がないことを示すのである。この点は後述する。

次に、引用部⑤の「この世界：何かなんてないってわかってしまった」のが「あの頃」なのか「今」なのか、あるいは「あの頃」と「今」とのあいだなのかも決定しきれない。「わかってしまった」の「しまった」が、単純な過去もしくは過去完了なのか、それとも現在完了なのか、過去進行形なのか文脈からも判断できないからだ。

引用部⑤は「思っていた」と「あの頃」のことを語った直後に、「この世界……わかってしまった」がくるので全部が「あの頃」のことかと思うと、「ねえ」という呼び掛けがある。語り手「僕」が聞き手に「今」「ここ」で語りかけているということだ。引用部⑤「だけど今すぐ死んだりしない」とされる「今」は語りの現在である。「耐えられない」と現在形で語られることとの結びつきからもそう言えるだろう。すると、「わかってしまった」も、「あの頃」の「僕」と「今」の「僕」との時間的連続性のなかでわかりつつあったことが、「今」「わかった」と現在完了で解釈できるわけだ。

時間軸がまったくわからないのが、引用部⑥である。「バイト」をし、「最終の地下鉄に乗っている」のは「あの頃」の「僕」なのだろうか、「今」の「僕」なのだろうか。最終の地下鉄に乗っている以上は、「地下鉄」という場所の一貫性からは、「あの頃」の「僕」のはずだ。また「乗っている」と現在形で語られていることも、直後に引用部③が繰り返しかることから、引用部①②と同じように考えれば処理できるだろう。ただし、それならば引用部⑦「これからの人生 期待なんかしてない」と語る「僕」はどの時間軸に存在しているのだろうか。

形式面ではこれ以上の考えようがないので、内容面からアプローチしてみる。まずは「あの頃」の「僕」について考えてみる。

「僕」は引用部①「本当に孤独になった気」がするきつかけとなる「最終の地下鉄」を「いつも」選んで乗っている。〈死の欲動〉に導かれるように、あえて「孤独」を味わおうとしているのである。「僕」は「最終の地下鉄」に乗ることをやめることはない。「なぜ それでも人間は我慢しながら 毎日生きているんだろう」と感じたいがために「最終の地下鉄」に乗っているとしか考えられない。嫌な気分になりたくないなら、「最終の地下鉄」に乗ることをやめればいいだけのことだからだ（「選んで」とあるので、他の選択肢があることはわかる）。引用部②で「僕」は、他者への共感を感じないとし、酔いつぶれているサラリーマンも、明日の朝にはルーティンのように出勤するだろうと考えている。これは、引用部③「なぜ それでも人間は我慢しながら 毎日生きているんだろう」と接続する感覚である。また、引用部④「誰がどこにいて何をしよう」と 僕にとっては全然 興味ない」とも繋がる。

不思議なのは《他者に興味ない》としているのに、「生

きていかなきゃいけないって 結構辛いこと」で「耐えられない」と他者の行動や内面（勝手に想像した「内面」だが）を参照しながら、自己の思考を練り上げている点だ。

このような齟齬は「僕」の未来への思いにも表れる。地下鉄でうつむいていたら「終点になる」（＝人生が終わってしまうの意だろう）とし、引用部④「大事なことはこれからの行き先」とポジティブな思考をしている。それが直後には、「地下鉄をもし乗り越したら どこにいったしまうのだろう」とする。先には「終点になる」と述べていたのにだ。すると、これからの「行き先」が未知となるのは「地下鉄」に乗るのをやめるときではない。引用部④でも「地上」ならば「見当がつく」と言っているのだから。しかしながら「僕」は「最終の地下鉄をいつも選んで乗って」いるのだから、「知らない世界」へなど行けるはずもない。

「僕」が行きたい「誰もいない世界」を自分の周りにいるような人々がいない世界ととり、「知らない世界」を未知の世界＝「これからの行き先」ととれば「あの頃」の「僕」も積極的に生きようとしていたと解釈できる。にもかかわらず、引用部⑤で「ドキドキする何かなんて

ないってわかってしまった それでも生きなきゃいけないって 結構辛いこと」とされると、「あの頃」の「僕」像はブレざるをえない。「病んでいた」からで済ましてはいけないだろう。

引用部⑥が「あの頃」なのか「今」なのかが不明なのは、助動詞の使用だけが原因とは言えない。「僕」のあり方が混乱を生むのである。

「あの頃」の「僕」は「病んでいた」のかもしれないと語る「今」の「僕」が、変化のない日常を「生きなきゃいけない」（引用部⑤）ことに「耐えられない」と語り、また「今」すぐに死ぬ気はない、なぜなら「そのうちにみんな死ぬ」（引用部⑤）からだとすることは、「あの頃」と「今」の「僕」とでは、なんら変化をしていないからだ（『月曜日の朝…』の語り手「私」と非常に似ている）。「今」の「僕」は、地下鉄に乗らず、この物語を語っているのだろう。しかし引用部①②が「今」のこのように読めってしまうように、「あの頃」も「今」もなんら変わらない「僕」はあたかも「今」も地下鉄に乗っているかのように読めってしまうのである。

だから引用部⑥は、あえて「今」の「僕」であり、「病んでいた」「あの頃」となんら変わらない日常を「辛い」

「辛い」と愚痴りながら送っているだけだと読むことができる。「いつもと同じように」とは、「あの頃」と同じように「最終の地下鉄」を選んで「今」も乗っているということだろう。

「大事なことはこれからの行き先」「知らない世界へ行きたい」とポジティブな思考をしたこともある「僕」だが、「いつになれば 違う時間帯の 生き方を選べるんだろう」と可能性だけはあるとしながら、しかし「いつも選んで」「最終の地下鉄」にあえて乗り続けているのだ。「あの頃」も「今」も「僕」は「違う時間」を生きるための行動をとらないまま、「そのうち」「死ぬんだ」と厭世家気取りでいるだけだ。

成長（変化といってもいい）しない「僕」像は、二節で見た『BAN』の「僕」と同じである。

そして、この歌詞の罪深いところは、「昨日の繰り返し」の人生、「ドキドキとする何かなんてない」日常を生きていくことの辛さを耐えられないとして、当たり前かのように語る点である。「今すぐ死」にはしないけれども、人はどうせ「そのうちにみんな死ぬ」と、語り手の「僕」は厭世的である「僕」を表象する。なぜ厭世的にならざるをえないのかを、つまり他の選択肢（地下鉄

以外のものに乗ること）を選ばない「僕」がその原因であることを隠蔽し、「違う…生き方を選べるんだろう」と自分のことであるにもかかわらず、他人事のように推量しているのが、「僕」だ。「地上」を行けばいいと自分でわかっているのに、あえて「地下」を行くことで、嫌な気分になることに酔いしれているのが「僕」だ。「僕」が、あたかも被害者であるかのように語るこのエセ悲劇を、真の悲劇として受けとってはならないだろう。

「何を言ってるんだ、君は？」と冷たく問うことしかできない。

ところで、『最終の地下鉄に乗って』が収められているシングルの表題曲『Nobody's fault』（二〇二〇年）には次のような言説がある（似かよった語句ばかりで「うんざり」だが）。

生き方を改めようなんて

できるわけないって逃げるのか？

いつのまにか大人になっちゃったんだ

言い訳ばっかで うんざり

傍線部を見ると、まさに『最終の地下鉄…』の「僕」

に対する批判となっている。しかし、そのような批判が「僕」には届かないだろう（物理的にも、心理的にも）。変わる気がないのだから。相反する歌詞を持つ楽曲が収められたシングルの前に、享受者ほどのような振る舞いをすればいいのだろうか。エンタメとしてそれぞれの楽曲を楽しむ人もいるのだろうか、《秋元康》の主義主張に一貫性がないことを、嘲笑するような享受者がいることを願うばかりである。

五、誰なんだ、その「桜」は

『最終の地下鉄に乗って』において、過去と現在との切り分けが曖昧であることを、そして自分が変容する気など毛頭なさそうな、結局は現状追認型の、悲劇的な自己に陶醉している語り手「僕」が、そのエセ悲劇の物語を創りあげていることを見てきた。本節では、人称の曖昧さについて考察していこう。対象とするのは、櫻坂46『桜月』（二〇二三年）である（ここにもまた「大人」という語句がくどいほど出てくるが、分析の対象とはしない）。

①こんなに誰かを好きになったこと

今までなかった ^aそんな気がするんだ

自分が傷つくことより

君を傷つけたくないって

思い込んでしまった

^b最終のバスを待つてる間

そのタイミ^bングは何度あっただろう

寒さも感じないくらい

僕たちは向き合ってたのに…

〴〵もしも〴〵なんて何の意味もない

②ああ 卒業式まであと何日？

その日から何が変わるって言うんだろう？

ただ通う場所が変わるだけで

新しい友達が増えるだけで

まだ 大切な何かを 残したまま

大人と呼ばれてしまう

③君を想う桜 風に吹かれて 心の中を舞い上がる

せめてもう少し満開でいてくれたなら…

どんな好きでいても 季節は過ぎて

あつと言う間に散り行くもの

^cあの日は 桜月〔中略〕

④ 僕が今ここで夢を語るのは そう
他の言葉 口に出しそうで…

愛とは身勝手なボール

投げれば自分だけは楽になる

そんなことできない

東京へ旅立つ決意を聞いて

君のその背中を押したくなつた

いつの日か笑顔の嘘

あれでよかったと思えるだろう

甘酸っぱい青春

⑤ 何 カッコつけてんだろうって

もう一人の自分が呆れてるけど

せめて そう君を思い出した時

そんな美しい恋だったと

独りよがりでもいいから

見送った僕を褒めてあげたい

⑥ ずっと咲き続ける花がないように

こうしていられないのなら

どうやってキレイに散ればいいのか考えたんだ

空に舞い上がって ただひらひらと

何度も思い出せるように

名残惜しく ゆっくり落ちて行け

⑦ そつと気づかれぬように 僕は瞼を閉じながら

君のその声 耳を傾け 記憶の中 残そうとした

⑧ 暗い夜空の先 確かに今も **満開の桜**が見える

あの花は僕が大好きだった人だ

⑨ 大人になつて

夢や理想が思うようにならなくなつても

あんなに美しい散り方ができたらな **〔後略〕**

わかりにくいストーリーを理解するためにも、相変わらぬ指示語（引用部①波線部a b）についてまずは考えよう。

まず波線部aである。「こんなに誰かを好きになつたこと」が「今までなかった」という「僕」。自分についての説明を「aそんな気がする」と語ってしまう「僕」の言葉には不信感を抱かざるをえない。

また、「好きになつた」「君」を傷つけない「僕」は、「bそのタイミング」を活かすことなく過ぎてしまう。なんの「タイミング」なのか、指示内容もすぐにはわからない。引用部④に「他の言葉 口に出しそうで…」とあるように、発話しなかったなんらかの言葉がある。そ

これは「夢を語」った言葉とは違う言葉であろう。「愛とは身勝手なボール 投げれば自分だけ楽になる そんなことはできない」とあるので、「できない」≡「口に出」さなかった「他の言葉」を「君」に言うことであろう。「愛のボール」とは「愛の告白」となる。ここでようやく「僕」は「君」を傷つけないために告白することを諦めたとわかるのだ。「何を言ってるんだ、君は？」である。ここでストーリーを整理しよう（時間軸など曖昧で整理しきれないが）。

①卒業式を前にした高校生（引用部②より言えるだろう）の「僕」は、学校の帰り最終のバスを「君」と待つことが多かった。しかし、告白のタイミングはあったものの、告白できなかったと後悔している。④「僕」は「君」が東京へ旅立つと聞いて、応援することを決めた。（*）告白の言葉を飲み込んだ僕は、代わりに自分の夢を語った。笑顔で語った夢≡嘘（本当は告白したかった）については、そのような嘘についてよかったと将来思えるだろうと「僕」は考えている。⑤「僕」は「君」を見送った。そしてそれが美しい思い出になるだろうと考えている。⑧満開の「桜」を「君」だと思う「僕」。

時間軸として難しいのは*をつけた箇所である。「僕」

がいる「今ここ」は、このストーリーの時間軸のどこなのだろうか。引用部⑤「見送った」や⑥「君のその声：記憶の中 残そうとした」から、東京へ旅立つ君を見送りに来た時点を「今ここ」と捉えられそうだ。それは引用部⑧で「今」、「大好きだった人」の面影を追っていることから確認できそうである。

では、引用部③波線部c「あの日」とはいつなのだろうか。引用部③が「あの日」のことで、引用部④が「今ここ」のことであるから、時間的前後関係があることはわかる。引用部②との繋がりで、卒業式≡別れの日≡季節が過ぎるという連絡があるとして、「あの日」≡「卒業式」の日と解釈できるのであろうか。だが、「桜」が「散る」日だとすると、「見送った」日とも解釈できるのである。

いつ「心の中」の「桜」が「あつと言う間に散り行く」（引用部③）のかが決定できないのである。別れを確信した日なのか、「君」と最後に別れた「今」なのか。時間軸が整序せずに投げ出されるだけだ。「何を言ってるんだ、君は？」

六、なぜ美しいのか、散る「桜」は

そして、「桜」がなにを比喻しているのかも決定できないのである。

「桜」は引用部③から「君を想う」主体であるとされる。そしてその想いは「心の中を舞い上がる」とされる以上、「僕」の「心の中」以外はないだろう。他者の心の中などわからないし、「君を想う」のであるから「桜」が「君」であるはずはない。だから、

A 「僕」の心のなかにある「君」を恋しく思う気持ちが「桜」である。

と、定義できるだろう。しかし、引用部⑧では、「満開の花」をして、「僕が大好きだった人」だとされるのである。「僕」が好きだったのは「君」であるはずなので、

B 「僕」が好きだった「君」が「桜」である。
ということになる。

『桜月』において、「桜」は「僕」なのか「君」なのかどちらなのか決定できないのだ。高木[2011]で、謡曲《忠度》のなかで桜に生成変化していく人物とそれによって引き起こされる意味の混線について論じた。そのような「僕」の「君」への生成変化がここに発生してい

るのだろうか。

引用部③で、「季節が過ぎて」いくなか、「好き」な気持ちは「散りゆく」Ⅱ《喪われる》と語られている以上、「桜」は「僕」の恋心であろう（別れ行く前から恋心が消えると語る「僕」の恋とはなんだろう）。そのような「僕」の「恋」を「美しい」としてもいる（引用部⑤）。「美しい」恋だから「桜」で比喻されるのであろう。加えて、引用部⑥で「どうやってキレイに散ればいいか考えた」とあるので、恋が破れる（恋を諦める）ことを「桜」が「散る」としていると捉えられる。成就しない恋だから、「何度も思い出せるように 名残惜しく ゆっくり落ちて行け」というのでもある。

ここまで見る限り、「桜」は「僕」の気持ち（恋心）でしかありえない。「僕」の心のなかの「君」だとしたら、「あつと言う間に散りゆくもの」、「キレイに散る」と語れないからだ。

そうだとすると、「満開でいてくれたら」（引用部③）と語る「僕」の恋心はあつと言う間になくなっていくということだろう。すぐに消え去る恋心をいかに「きれいに散るか」（引用部⑥）と考えている「僕」は、悲劇の主人公であることに酔っているだけだろう。

それが突然引用部⑧で「あの花は僕が好きだった人だ」とされるのである。その「桜」は、「僕」の眼前に実在する「満開の桜」ではない。なぜなら「暗い夜空の先」に「確かに今も」見えるとされる「桜」は、「見える」気がする「桜」であって、実体的な桜ではないはずだからだ。それは幻影の桜である。「確かに」「見える」という語り方は、見えない桜を幻視していることを意味する。引用部⑧で「桜」の意味するものが「僕」と「君」とに分裂してしまう。引用部③を見る限り、「君」を一貫して「桜」で比喻しているとは絶対に言えない。では、引用部⑨「あんな美しい散り方」をしているのは誰だろう。文脈的には「僕」の恋心ととれるのであるが、「あんな」と表現し、直前に「君」を「桜」としてしまったことで、「君」の「散り方」と読める可能性が拓かれてしまう。「僕」の「美しく」「散る」恋心であったものが、散らされる「君」、あるいは散ってしまった「君」とされてしまうのである。「僕」が諦めたことで、「君」は散ってしまうという恐ろしいほどの「僕」の身勝手さが浮上してくるのである。

結局のところ、「君」が「僕」の恋心「桜」へと生成変化したとは言えないのである。「君」はどこまでも

「僕」の美しい失恋を描くための〈道具〉でしかない。

ところで、「僕」の心のなかにある「君」への恋心が外部へ投射され、「満開の桜」として形象化されたという意見もあるかもしれない。が、一貫して「桜」は「散る」ものの、「僕」の失恋の象徴として表象されてきた。引用部⑨で「美しい散り方ができたなら」とも語られる「僕」の失恋。また、引用部③で「満開で」ある「桜」は「僕」の恋心であった。「今」見える「満開の桜」は「僕」の恋心であって、「君」そのものではありえないだろう。

それにしても、東京へ行ってしまう「君」に告白もできずに（しないと決めて）終わる「僕」の恋、その恋を諦めることを「キレイに散ればいいか考えた」というのはわかるのだが、引用部③にある「満開でいてくれたら」という語り方には問題があるだろう。「どんな好きでいても」時間がたつと「あつと言う間に散りゆく」「好きではなくなるというのは、「君」が東京へ行かなくても成り立つ公式であろう。「僕」は「君」への恋心が必ず冷めることを前提にしているのわけだ。だからこそ、「満開でいてくれたら」「ずっと好きな気持ちが続けたらと、他人任せに祈るのである。身勝手に楽になるための道としての告白を諦めた「僕」であるが（引用部④）、

「君」を「好き」だという気持ちがすでに「身勝手」で「一人よがり」でしかない。

「僕」の思考と行動とは、「君」の気持ちとは無関係に（対話なしに）なされている。引用部④「いつの日か」「あれでよかったと思える」、引用部⑤「美しい恋だった」と、「君を思い出した時」に「自分を褒めてあげ」られるような振る舞いをしているのである。「君」は「僕」のことを好きかもしれない好きじゃないかもしれない。そのような事実とは関係なしに、成就しない自分の恋と、諦めて告白しなかった自分にナルシスティックに酔っているだけなのが「僕」である。

それは、乃木坂46『Monopoly』（二〇一三年）の、「君」の「やさしさ」を「愛」だと勘違いして逆ギレした挙げ句、自転車で追いかけるストーカー気質の勘違い男Ⅱ「僕」と同じような思考をしているのであろう。

まったく、「何を言ってるんだ、君は？」である。

七、矛盾を前にした〈われわれ〉は

以上、《秋元康》の歌詞の「矛盾」する言説や「曖昧」すぎる言説を、複数の歌詞中にみて、批評してきた。論

が「……なのであろう。ただし、〴〵という可能性も残る」という展開になりがちであったのは、歌詞の「曖昧さ」を、できるだけきちんと整序しながら解釈しようとしたためである。分析の文体が対象の文体にここまで影響を受けるとは思わなかった。

櫻坂Ⅱ櫻坂46のメンバーが自分の置かれた状況や心情を代弁してくれていると思ひ込み、この矛盾した歌詞のなかから自分に都合のいい部分だけを取り出して、納得したり救われたと思ったりして、変化していくことを止めてしまふ、そんな享受者たちが生産されるのではないかとの危惧から、この論述を進めてきた。そのような愚かな存在はいないのかもしれないと信じながらである。

愚かな登場人物たち（「僕」「私」）を批判せずにのさばらせることは、社会から降りることを戦略的に選ぶ者や管理社会をまじめに批判する者をも「愚かな」存在に貶める可能性があるだろう。《秋元康》が創り出すファッションとしての抵抗が、憧れの対象となったり、逆に真摯な〈抵抗〉を無駄なものとして喧伝されるようなことあつてはならない。

また、自身が置かれた状況をめぐって、手前勝手な言説を弄して、自己を都合よく肯定するような欺瞞を、

「欺瞞」であると指摘することも重要であろう。

※

高木 [2024] と本稿で、《秋元康》の歌詞のいい加減さを論じてきたのであるが、もうひとつの問題系が残されている。《秋元康》が産み出す「僕」の恋愛観が、いかに〈男性中心主義〉に則った、〈男性〉に都合のいいものであるかを批判的に論じることが必要だろう。〈女性〉メンバーが「僕」を主語とする歌を唄うことで、〈男性中心主義〉が、あたかも女性たちによって許された価値観であるかのように思わされてしまう。そのような《秋元康》の歌詞のシステムは批判されてしかなるべきだろうし、歌詞の言説もまた丁寧に批判されねばならない。

《秋元康》の、のたくる歌詞にいい加減うんざりしているのも、すぐには着手しないであろうが、いつの日にか《秋元康》の歌詞における恋愛イデオロギー批判を書くこうと決意して、この長い論考を終わることとする。

【注】

(1) 言葉があるから恋愛が終わるしかなかったと唄う歌については、高木 [2009] で論じたので、参照

してほしい。

(2)

「胸騒ぎ」とは『日本国語大辞典』によれば次のような意味である。

(1) 心配事や凶事などのために心臓の鼓動がにわかに激しくなること。

(2) 凶事の予感としてなんとなく心が穏やかでないこと。

悪い意味しかない。また「胸騒ぎ」は「する」ものであって、誰かに伝える（伝わる）ものでもない。この箇所にはふさわしい語句とは言えないだろう。

(3)

高校三年生と断定したのは、歌詞に「いつもの教室に親と教師と私 重苦しい進路指導のその時間」や「制服を脱ぎ捨てて大人になる 校則のない世界へ」とあるからである。

(4)

《秋元康》が作詞した楽曲はメロディーラインも編曲も素晴らしく、楽曲を聴いているとメロディーと合ったワンフレーズが効果的に使われており、一瞬いい楽曲だと錯覚させられる。CMのキャッチコピーのような歌詞と言ってもよからうか。歌詞を丁寧に読みこむと、意味がわからない

かったり、ほとんど意味がなかったりするものが絶対的に多いのであるが。

なぜ別れたのがわからないままに、「君が若すぎ」のための別れを後悔する『アナスターシャ』（二〇二〇年）や、恋心がなくなったことをあたかも悲恋のように唄う『いめんね Fingers crossed』のような乃木坂46の楽曲などもある。

【参照本文】

歌詞の引用は、「Uta-Net」(<https://www.uta-net.com/>)によった。また、歌詞の検索は、「MOJIM」(<https://mojom.com/jpzlistF.htm>)と「うたまっぶ」(<https://www.utamap.com/indexkasi.html>)を使用した。歌詞のなかの傍点や傍線は断りがない限り高木による。また「」内は高木による註記である。

坂道シリーズの楽曲（タイトルは『』で括った）は以下のCDに所収されている。乃木坂46『アナスターシャ』がシングル『しあわせの保護色 TYPE-B』に、『インフルエンサー』『気づいたら片思い』が『Time flies (Complete Edition)』『大人たちには指示されない』がシングル『いめんね Fingers crossed』に、『制服を脱

いでサヨナラを』が『それぞれの椅子 TYPE-B』に、『Monopoly』がシングル『Monopoly』に、櫻坂46『大人は信じてくれない』『月曜日の朝、スカートを切られた』『制服と太陽』が『真っ白なものは汚したくなる』に、『最終の地下鉄に乗って』『Nobody's fault』『BAN』『無言の宇宙』『One-way-stairs』が『As you know? (完全生産限定盤)』に、『桜月』がシングル『桜月』、日向坂46『愛はこっちのものだ』がシングル『One choice』に、それぞれ所収されている。

稲垣潤一『クリスマスキャロルが流れる頃には』が『稲垣潤一25周年ベスト RAINY VOICE』に所収。

「Yakult1000」のCMは、『【ヤクルト公式】Yakult（ヤクルト）1000：「秋元康」篇15秒 (<https://www.youtube.com/watch?v=K9FBD19SKvU>)』によった。

【参考文献】

基本的には初出で立項し、最新のものを「↓」で示したが、大幅に書き直したものは最新のものを示し、初出を「↑」で示した。

有里 典三 [2023]: 『K.ポパー、W.L.トマス、R.マー
トンのリスク社会論—バーチャル・リアリティと予

言の自己成就―」（「通信教育部論集（26）」）

高木 信 [2009→1997]:「教育／権力／物語―もう一つの〈源／平〉合戦」（『死の美学化』に抗する『平家物語』の語り方 青弓社）

― [2011→2020]:「見えない〈桜〉への生成変化、あるいはテキストが〈亡霊化〉する」（『亡霊たちの中世 引用・語り・憑在』水声社）

― [2024]:「残酷な《秋元康》が支配する (1)―〈おっさん〉が「お見立て会」を作っている。櫻坂46＝櫻坂46のために―」（「相模女子大学紀要 第八七号」）

フーコー、ミシェル [1975→2020]:『監獄の誕生―監視と処罰―』（新潮社）

・その他、『世界大百科事典』『日本国語大辞典』はジャパンナレッジによった。

（本学教授）